

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320175

研究課題名(和文) 体制転換期ネパールにおける「包摂」を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究

研究課題名(英文) A comparative ethnographic studies on changing social dynamics on "inclusion" in Nepal in the transitional phase

研究代表者

名和 克郎 (Nawa, Katsuo)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：30323637

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、連邦民主共和制に向けた体制転換期にあるネパールにおいて、様々な中間集団の存在を前提として展開される種々の政治的な主張と、そうした中間集団に属するとされる様々な人々の行う実践とが織りなす布置を、近年ネパールにおいて急速に普及した翻訳語サマーベシーカーン(「包摂」)を鍵概念として、明らかにするものである。「民族」や「カースト」といった枠組を前提とした動きに加え、そうした枠組を前提としては見えてこない様々な動きをも検討し、さらに様々な「包摂」への動きの背景となっている海外移住・出稼ぎの問題をも視野に入れることで、ネパールにおける社会動態の展開について、最新の統合的理解を提出した。

研究成果の概要(英文)：This research project is to demonstrate the constellation of various political discourses which presuppose the existence of various intermediate groups on the one hand, and diverse practices by people who are supposed to belong to one or several of these intermediate groups on the other in contemporary post-conflict Nepal in the transitional period, supposedly towards a federal republic, using the 'samaveshikaran', a Nepali word rapidly prevailed as the equivalent of 'inclusion', as the key word. We have obtained an up-to-date understanding of the social dynamics of contemporary Nepal, by dealing not only with movements, discourses, and practices which are based on 'caste', 'janajati' ('nationalities'; or roughly 'ethnic groups'), or regional identities but also with movements, discourses, and practices which are clearly discordant with those which are based on these group categories, and also by connecting them with the issue of immigrants and non-resident Nepalis.

研究分野：文化人類学

キーワード：ネパール 包摂 国際研究者交流 文化人類学 民族誌 社会動態

## 1. 研究開始当初の背景

グローバルに流通する政治的概念が、そのグローバル性を前提としつつも、具体的な社会文化的状況と結びつきつつ、国家、運動体、また人々自身によって多様な形で受容或いは拒絶され、それが事態の新たな展開をもたらすという現象については、研究開始当初、既にかんがりの研究蓄積が存在していた。こうした現象を研究するに当たっては、国際機関やNGO等の動向を視野に入れ、また同一の概念の流用の多様性を検討するために、広域にわたる比較が行われるのが一般的である。しかし、ローカル及びナショナルな動態をも含めた現象のより深い理解の為に、範囲と焦点を絞った比較研究を平行して行う必要がある。

ネパールは、こうした狭い範囲での比較研究が強く要請される地域の一つである。第一に、ネパールでは、「マイノリティ」の運動が、「カースト」「民族」「地域」という三つの問題系により分断され、さらに「宗教」「階級」「ジェンダー」といった枠組とも絡みあって、複雑かつ多様な展開を辿ってきた。その背景には、カースト的秩序に基づいた国家法が20世紀中葉まで存在し、その後一元的な国民統合路線を経て多民族性、多言語性が認められ、さらに様々な抑圧からの「解放」を主張して支持を集めたネパール共産党マオイストとの「内戦」を経て、現在連邦民主共和制に向けた体制転換期にあるという独自の歴史過程の存在がある。さらに、ネパールは国際援助に強く依存する国家であるため、グローバルに流通する概念が国内的にもしばしば重要な意味を持ってきた。

従来のネパール研究の主流は、個々の民族、カースト、地域の動態を巡る民族誌的研究であった。「包摂」と「排除」についての研究も急速に研究が進展しており、また欧州を中心にネパールにおけるアクティビズムの研究も盛んになっているが、個別の特定社会の民族誌的研究との同時代的接合は、課題として残されていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、かつてヒマラヤのヒンドゥー王国であり、連邦民主共和制に向けた体制転換期にあるネパールにおいて、多種多様な中間集団の存在を前提として展開される種々の政治的な主張と、そうした中間集団に属するとされる様々な人々の行う実践とが織りなす布置を、近年ネパールにおいて急速に普及した翻訳語サマーベシーカラン（「包摂」）を鍵概念として、明らかにするものである。多民族性、多言語性、多宗教性、多文化性が公式に認められ、新たな政治体制に向けた模索が続くネパールにおいて、「先住民族」「ダリト」（「不浄」とされた「カースト」を指す）などグローバルに、或いは国境を越えて流通する概念に基づいた様々な権利主張の運動と、マオイストから王党派に至るナショナル

な水準での政党の主張、さらには人類学的なフィールドワークによって明らかにされる、必ずしもこうした運動や主張により回収されないローカルな水準での人々の状況、以上三者の関係と齟齬を、多層的、多元的に検討することから、ネパール社会の同時代的展開に関する統合的理解を提出することが目的であった。

## 3. 研究の方法

ネパール国内及び周辺で既に十分なフィールドワークの経験を持つ研究者が、(1)それぞれのフィールドについて、中間集団に基づいて「包摂」を求める政治的主張と活動、マオイストを含む政党の活動、及びこれらの活動の社会内における位置や浸透度を明らかにし、

(2)「包摂」や中間集団を指す新たな語彙（「アーディバーシー（「先住民）」、「ジャナジャティ（「少数」民族）」、「ダリト」等）の使用範囲と用法の偏差に着目し、外来の概念のローカルな屈折の諸相を調査する。

また「包摂」等を巡る言説では過去が新たな形で解釈されることがしばしば見られるため、

(3)可能な限り当該地域の言説と社会の歴史の変遷を踏まえ、同一フィールドでの調査を繰り返すことで概念の使用法の変化にも気を配る。

以上の具体的作業により、相互対照可能な精度の高い政治人類学的民族誌記述群を提出すると共に、

(4)近隣国家の状況との比較を行う。

民族誌的フィールドワークを主たる方法論上の基盤として行う以上の作業によって、ネパールの錯綜した政治状況の全体としての特異性を明らかにすることを目指した。

## 4. 研究成果

研究代表者、研究分担者、連携研究者は、それぞれのフィールドにおいて、以下の調査・研究を行った。

研究代表者の名和は、第一に、極西部ネパールから隣接するインド、ウッタラーカンド州の高地を故地とし、ランあるいはビャンシーとして知られる人々について、20世紀後の国家の少数者政策の関わりの変遷を踏まえた上で、彼らが近年の「包摂」「先住民」といった概念とどのように関わろうとしているかを調査した。また第二に、ネパールの「包摂」を巡る問題の歴史的背景を明確にする為に、19世紀中葉のカースト的な法典から、多民族性、多言語性、多文化性、多宗教性が認められた現行暫定憲法に至る主要な法をネパール語原文に即して再検討し、国家が国内の様々な集団を、どのような前提に基づきどのように扱ってきたか、明らかにした。

研究分担者のうち佐藤は、主にカトマンドゥ盆地において、労働階級（建築労働者、家事労働者等）の女性達に焦点を当てた調査を

行くと共に、中間層の女性や労働運動・女性に関わる女性達及び現地ネパール研究者にも広くインタビューを行うなどして、ジェンダー及び階級の視点から「社会的包摂」がいかに進んでいるか、またそもそも進んでいるのかについて、批判的に検討した。

藤倉は、中西部ネパール平野部及び丘陵部での調査を通じて、西ネパールにおける民族関係（タルー、パハリ）の変容の実態を、連邦制と民族自治の問題との関連で検討すると共に、西ネパールの町の交差点に置かれた彫像の変遷の事例等に基づき、様々な人々が日常目にする物体を巡る政治という問題を、包摂の問題と絡めて検討した。

マハラジャンは、カトマンドゥ盆地を主たる基盤とするネパールの民族政党 Nepa Rastriya Party の活動に関する詳細な調査を主な基盤として、現在も議論が続いている連邦制のあり方を巡る問題と、包摂性および地域社会の相互関係の展開について、時系列に沿って具体的に検討した。

宮本は、ネパールと同様インドと中国に挟まれたヒマラヤの小国であり、ネパールと異なり現在まで王国であることを前提とした民主化が進行しているブータンについて、その民主化プロセスと価値意識の変容に関する政治人類学的研究を、ネパールとの対比も含めて行った。

南は、ネパール社会の現状を論じる際に避けて通ることの出来ない移民の問題に正面から取り組んだ。従来の調査で培った関係性を拡大させる形での調査によって、移民の現状と共に送金の機能や帰還後の個人の変化をも辿ることにより、移民は人々をグローバル経済に取り込む一方、それにより人々をネパール社会へと参画させる一面があることを指摘した。

森本は、主に、「楽師カースト」として知られ、またダリトでもあるガンダルバの社会的包摂について、ネパール国内での「包摂」の政治の隆盛に伴う状況の展開と、海外に移住した人々のライフストーリーの双方に焦点を当てて、検討した。

安野は、西ネパールのブラーマン優位の村落社会における包摂と排除の問題を、人民戦争後の変化に焦点を当てて検討すると共に、ネパール語を母語とするヒンドゥー高カーストであり、従来ネパールにおいてドミナントな地位を占めてきたバフン、チェットリが、先住性を正面に出して結成した団体に関する調査を行った。

連携研究者のうち田中は、人身売買サバイバー達のテーマコミュニティに焦点を当て、そうした人々が作る当事者団体の調査を行うと共に、移住労働者の当事者団体等でも調査を実施した。

上杉は、従来研究してきたグルカ兵に加え、ネパール移民に関する調査を行った。とりわけ世界各国で組織化が進んでいる在外ネパール人協会に焦点を当てて、ネパールに対し

て多重市民権を求めるその活動について詳細に分析した。

橘は、長年にわたる自身の調査を引き継ぐ形で、チェパンとして知られる人々の外部世界との関係性の作り方の変化を詳細に調査すると共に、マレーシアでのネパール人出稼ぎ労働者に関するフィールドワーク、カトマンドゥでのダリトの社会的包摂についての聞き取り調査も行った。

さらに本研究では、毎年 1～数名の研究協力者をネパール等に送り、ネパール共産党マオイスト（バスカル・ゴウタム）、カトマンドゥ盆地のストリート・チルドレン（高田洋平）、日本にも長い研究の伝統がある「ヒマラヤ交易民」タカリーの現在（森田剛光）、カトマンドゥ盆地を中心に住むネパール民族の中のカーストであるカドギ及びネパールの食肉市場（中川加奈子）、中西部ネパールにおける多元的な医療実践とその変容（中村友香）という、いずれもネパールにおいて「包摂」を多角的に扱う際に重要であり、かつ研究分担者、連携研究者の研究と相補的な関係にある主題について、新たな知見を得た。

以上の個別的な成果を総合することで、本研究は全体として、以下のことを明らかにした。

(1) 「内戦」後のネパールでは、狭義の政治の場において、「包摂」の問題が、「民族」（ジャナジャータ）、「カースト」（とりわけダリト）及び「地域」の問題として論じられる傾向が強く、近年のネパールの「包括」を巡る研究の多くも、主にこうした問題を扱っている。本研究の参加者が扱ったこうした領域を扱った事例のなかには、従来の社会過程の延長或いは展開として特定の人々の状況を比較的容易に捉え得る事例（名和、森本、森田）がある一方、キリスト教化（橘）、民族政党の出現（マハラジャン）、カーストと民族の間での公的なアイデンティティの揺れ（中川）、さらには従来インド起源を主張していたネパール語を母語とするヒンドゥー高カーストによる先住性の主張（安野）といった形で、従来十分に報告されていなかった展開により、状況に大きな変化が見られる場合もあることが明らかになった。後者の諸事例は、「包摂」を巡る運動や動員が、周囲の様々な運動や動員との関係において常に再帰的に展開する過程であることを、端的に示すものである。

(2) 本研究の参加者の多くは、民族、カースト、地域といった枠組では捉えきれない状況を、「包摂」との関係で検討した。ジェンダーと階級（佐藤）、政治と政党（藤倉、マハラジャン、ゴウタム）、医療実践（中村）といった主題に基づく検討は、ネパールの「包摂」を巡る政治的議論の中心から外れたところにある問題の重要性を改めて示すこととなった。とりわけ、人身売買サバイバー（田中）、ストリート・チルドレン（高田）といった人々は、政治における「包摂」の議論に

乗ることはあまりないとしても、排除の解消が最も求められる人々である。こうした人々の「包摂」に関わる現状を具体的に明らかにすることが出来たことは、本研究の大きな成果である。

(3) こうした問題と交わる形で本研究が検討してきたのが、移住・出稼ぎを巡る問題である。民族やカーストを一応の単位として「包摂」を論じる場合にも、移住・出稼ぎを巡る問題は不可欠なものとして現れている(名和、森本、南、橘、森田、他)。他方、主に成功し海外に定住したネパール人移民からなる在外ネパール人協会が、ネパールと居住国との二つの国家への帰属を同時に求める運動を展開するのに対して(上杉)、多くの移民労働者は移民先で「ネパール人」として自らの権利主張を行う一方、自国の家族との関係性を維持し、最終的には裕福になって帰国し、自分達のエンパワーメントを行う方向へと向かう場合がある他(南、橘、他)、個人単位の経験に目をうつすと、ネパールでなく渡航先の国の社会に統合されることをもって「包摂」を語る場合もある(田中、森本)。以上のような移民と「包摂」を巡る状況の大まかな布置を明らかに出来たことは、本研究の重要な副産物の一つである。

(4) 「包摂」を巡るネパールの状況は、周辺地域との比較によってよりよく理解出来る。とりわけ、国王を中心として、枠付けられた民主化を進めるブータンとの比較(宮本)は、二つのヒマラヤの国家の対照性を際立たせる。また、「包摂」の語が用いられる領域が国家により大きく異なっていることが何人かの研究分担者、連携研究者から指摘されたが、このことは「内戦」後のネパールにおける「包摂」の政治の展開を、グローバルに流通する概念のローカル・ナショナルな流用の典型例として単純に捉えることは出来ないことを示すものである。

以上により、「サマーベシーカラン(包摂)」の語をキーワードとして、ネパールにおける社会動態の展開について最新の統合的理解を提出するという本研究の目標は達せられたものと考えられる。

本研究の成果の主要部分は、本研究を補完する形で行われた国立民族学博物館共同研究「ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」の成果と合わせ、日本語の論文集として2016年度前半に刊行すべく準備を進めている。また、2014年5月には、本研究の成果を発表し国際的な検討に付すため、千葉県千葉市で開かれた人類学の国際学会において、研究分担者の藤倉達郎と協力して二つのパネルを出し、さらに南アジアから気鋭の研究者3名(Lokranjan (Ramesh) Parajuli, Mrigendra Bahadur Karki, Chudamani Basnet)を招き、関係のテーマについての発表及び本研究の成果に対するコメントをお願いした。この時の成果の一部は、ネパールにおいて英語で出

版すべく準備を進めているが、2015年4月の大地震の影響で出版時期は遅れる可能性がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 19件)

名和 克郎、ネパールの「デモクラシー」を巡って—用語・歴史・現状、現代インド研究、査読有、5巻、2015、69-87

[http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/static\\_indas/wp-content/uploads/pdfs/05-05\\_nawa.pdf](http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/static_indas/wp-content/uploads/pdfs/05-05_nawa.pdf)

宮本 万里、ブータンの民主化プロジェクト—「政治的なもの」からの距離をめぐって、現代インド研究、査読有、5巻、2015、149-165

[http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/static\\_indas/wp-content/uploads/pdfs/05-09\\_miyamoto.pdf](http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/static_indas/wp-content/uploads/pdfs/05-09_miyamoto.pdf)

佐藤 斉華、「包摂」の排除するもの—階級的ネパールの可能性、帝京社会学、査読無、28巻、2015、1-31

上杉 妙子、移民の軍務と市民権—1997年以前グルカ兵の英国定住権獲得をめぐる電子版新聞紙上の論争と対立、国立民族学博物館研究報告、査読有、38巻4号、2014、555-605

MORIMOTO Izumi and Prem Sagar Chapagain, Entrepreneurship in the Peripheral Regions: A Case of Tourism in the Himalayan Village Manang, Nepal, International & Regional Studies, Meiji Gakuin University, 査読有、46巻、2014、1-18

SATO Seika, 'Satisfied with My Job' - What Does She Mean?: Exploring the World of Women Construction Workers in Nepal, International Journal of South Asian Studies, 査読有、6巻、2013、79-97

TANAKA Masako, Balancing between Politics and Development: The Multiple Roles Played by Indigenous People's Organisations in Nepal, History and Sociology of South Asia, 査読有、7巻1号、2013、61-78

DOI:10.1177/2230807512459405

[学会発表](計 51件)

NAWA Katsuo, On "Politics" in Byans, far western Nepal: Rajniti, Village, and Individual, International Union of

Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) Inter-Congress 2014 with Japanese Society for Cultural Anthropology (JASCA), 2014年5月16日、幕張メッセ(千葉県・千葉市)

SATO Seika, When Women Go Out from Home: Exclusionary Powers against Women in Public Space of Kathmandu, IUAES Inter-Congress 2014 with JASCA, 2014年5月16日、幕張メッセ(千葉県・千葉市)

MORIMOTO Izumi, Changing Lives of the Musical Caste Gandharbas and the Social Inclusion in Nepal, IUAES Inter-Congress 2014 with JASCA, 2014年5月15日、幕張メッセ(千葉県・千葉市)

YASUNO Hayami, Chhetris and Brahmins as Khas Arya Adivasi: High Castes' Controversial Claim for Indigenosity, IUAES Inter-Congress 2014 with JASCA, 2014年5月15日、幕張メッセ(千葉県・千葉市)

MAHARJAN K. L., Role of Ethnicity Centered Political Party in Inclusion: Focusing on the Nepa Rastriya Party, IUAES Inter-Congress 2014 with JASCA, 2014年5月15日、幕張メッセ(千葉県・千葉市)

FUJIKURA Tatsuro, The Constitution of the Political Objects in Contemporary Nepal, IUAES Inter-Congress 2014 with JASCA, 2014年5月15日、幕張メッセ(千葉県・千葉市)

UESUGI Taeko, Envisioning a De-territorialized Nation-State: The Campaign for Multiple Citizenship Legislation of the Non-Resident Nepali Association (NRNA), IUAES Inter-Congress 2014 with JASCA, 2014年5月15日、幕張メッセ(千葉県・千葉市)

TACHIBANA Kenichi, Who Improved Chepangs' Life? Involvement of Nation Building and Changes of Social Categories among the Chepangs in Nepal, IUAES Inter-Congress 2014 with JASCA, 2014年5月15日、幕張メッセ(千葉県・千葉市)

[図書](計 6件)

南 真木人・石井 溥 編、明石書店、現代ネパールの政治と社会-民主化とマオイストの影響の拡大、2015、478

佐藤 齊華、三元社、彼女達との対話-ネパール、ヨルモ社会におけるライフ/スト

ーリーの人類学、2015、340

FUJIKURA Tatsuro, Martin Chautari, Discourses of Awareness: Development, Social Movement and the Practices of Freedom in Nepal、2013、320

JOSHI, N.P., MAHARJAN, K. L., and Piya, L. Lambert Academic Publishing, Understanding Maoist Conflict in Nepal: Initiatives of Civil Societies on Social Capital Development for Peacebuilding in Hills、2013、140

[産業財産権]  
出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

[その他]  
ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

名和 克郎 (NAWA Katsuo)  
東京大学・東洋文化研究所・教授  
研究者番号: 30323637

### (2) 研究分担者

佐藤 齊華 (SATO Seika)  
帝京大学・文学部・准教授  
研究者番号: 10349300

森本 泉 (MORIMOTO Izumi)  
明治学院大学・国際学部・教授  
研究者番号: 20339576

安野 早己 (YASUNO Hayami)  
山口県立大学・国際文化学部・教授  
研究者番号: 40144307

南 真木人 (MINAMI Makito)  
国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授  
研究者番号: 40239314

マハラジャン ケシャブ・ラル (MAHARJAN K. L.)  
広島大学・大学院国際協力研究科・教授  
研究者番号: 60229599

宮本 万里 (MIYAMOTO Mari)  
国立民族学博物館・文化資源研究センター  
・研究員  
研究者番号: 60570984

藤倉 達郎 (FUJIKURA Tatsuro)  
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研  
究研究科・教授  
研究者番号：80419449

(3)連携研究者

田中 雅子 (TANAKA Masako)  
上智大学・総合グローバル学部・准教授  
研究者番号：00591843

上杉 妙子 (UESUGI Taeko)  
専修大学・文学部・兼任講師  
研究者番号：90260116

橘 健一 (TACHIBANA Kenichi)  
立命館大学・産業社会学部・非常勤講師  
研究者番号：30401425